

## 基調講演

# 台湾史を教える ——通説・俗説・誤説への挑戦——

呉 密察  
永吉美幸 訳

## はじめに

日本台湾学会学術大会シンポジウムにご参加の皆さま、こんにちは。まずは、本シンポジウムにお招きいただき、このテーマに関して、私自身の仕事や考えを皆さまと分かち合う場に参加できることに感謝します。今日のシンポジウム参加者の多くは、昔からの親しい友人です。それだけに、新型コロナウイルス感染症拡大の関係で会場に行き、皆様と直接交流できないことが本当に残念です。

今回のシンポジウムのテーマは、「台湾を学び、教える」です。「台湾を教える」とは文字通り、台湾に関する事、または台湾史の内容を相手に教え、理解させるという意味でしょう。私たちのように学校制度のなかで教育にたずさわる者にとって、何かを教えるというのはごくごく日常的な当たり前のことです。しかし、教育学者に言わせれば、それは広範な内容を含む一つの大きな学問領域です。理論や実務をはじめ、いかにデザインし、運営し、実践するかに至るまで、さまざまな研究と実践報告があります。ただ、本シンポジウムのねらいは、そういうことではないでしょう。ですから、私も今日はそのような話はしません。

## 第1節 台湾史を教える際にまず意識すべきこと——対象と目的を見極める

各登壇者のテーマを見ると、それぞれ市民、高校生、台湾の大学生、それに日本の大学生に「台湾を教える」こととなっています。私とそのトップバッターであることを考えると、申し上げたいのは、台湾あるいは台湾史を教える場合、まず重要なのは、誰を対象とするか、その目的は何かということです。この基本的な問題が、どんな内容を教えるべきか、どう教えるべきかを決めるのです。さらには、台湾や台湾史を教えることの意義にも関係します。

台湾史を教えてきた私自身の経験を申し上げますと、これまでいろいろな方を対象に、さまざまな目的で台湾史を教えてきました。台湾大学の歴史学科で台湾史を教える以外に、一般の社会人向けに教えたこともあります。台湾アイデンティティを育てるさまざまな民間の教育機関、例えば建国学院、台湾文化学院などでも何年か講義をしてきました。先住民族に彼らの歴史を教えるために、先住民族の生徒が多い玉山神学院でも数年間教えたことがあります。大学のなかで教えるといっても、皆さんご存知のとおり、歴史学科の学生に台湾史を教えるのと、それ以外の学生に教えるのでは違うはずですが。それにまた、歴史学科の学生に教えるといっても、学部生に対する講義と大学院のゼミや演習では、それぞれ教え方もやり方も違うでしょう。

これらは、教育や研究を仕事とする私たちのような者にとっては非常に明白なことですから、

私から多くを申し上げるまでもないでしょう。そこで、ここからは、私自身の考えについて、少しご説明したいと思います。私自身がふだんこうした内容を教える時の進め方、一種の方法に関する考えです。

## 第2節 私の授業の作り方—通説・俗説・誤説への挑戦

私は通常、教える対象と目的に応じて授業を組み立てます。私には教育学者のように、まずは相手の興味を引き出してどうこうするといったような決まったカリキュラムデザインはありませんし、それに沿って教えるということもしません。それに、完璧な授業内容を事前に cooking しておいて、小包のような知識を系統立てて学生に届けるのも好みません。私はただ対象と目的を考えて授業に臨みます。

また、淡々と事実を述べるということはず、問いを立てて対話をする形式で授業を進めます。常に、通説・俗説・誤説に挑戦するのです。しかし、正直に言って、こうした通説・俗説・誤説は少なくありません。そのため、私の授業は、ある意味で挑発的なものになります。ですから、受講者の中には、怒りを覚える人もいますが、それは試す価値のある冒険です。こうした通説・俗説・誤説に真っ向から挑戦してこそ、私たちの授業は意義あるものとなるからです。すでに cooking された知識をただ放送して聞かせるだけなら、私たちは「歩く蓄音機」になってしまいます。私は問いを立てて対話をする方法を通して、授業のなかで受講者が一緒に問題を考えられるように導きたいと思っています。受講者が単に知識を受け取ったり、情報を得たりするだけでは不十分なのです。

## 第3節 日本で台湾史を教える上での制約

それでは、本日のテーマに入りましょう。台湾あるいは台湾史を教えることについてです。このシンポジウムの登壇者である陳文松教授は台湾の大学における台湾史教育について報告されますが、私は主として、日本でいかに台湾史教育を行うかについてお話したく思います。つまり、相手が日本人である場合、一般の社会人や大学生、高校生の場合、まず確認しなければならないのは、なぜ日本で日本人を対象として台湾史を教えるのか、ということです。そのうえで、どのような方法を用いて、背景の異なる日本人にどのような内容の台湾史を教えるかを検討することができます。私たちのように台湾史の研究や教育にたずさわる者は別として、一般の日本人の間では、台湾史に関する知識の量は、極めて少ないといってよいでしょう。理解の質についても、かなり大きな偏りがあります。

一つの例をご紹介します。皆さまには信じられないかもしれませんが、1980年代半ば、私が日本に留学した時に部屋を借りた家主のパートナーは40代くらいの中年女性でしたが、なんと台湾がどこにあるかを知りませんでした。私をバングラディッシュから来た留学生だと誤解していました。きっと彼女は知らなかったと思います。日本が台湾を50年間、植民地統治していたことを。

1990年代に入ると、日本のメディアが台湾を取り上げる機会も少しずつ増えてきました。あの女性のような状況もきっと大きく改善されたことでしょう。

しかし一方で、日本人の間には台湾に対するステレオタイプのイメージも、徐々に形成されたようです。例えば、台湾にこうしたイメージを持っている方も多いかもしれません。日本語を話し、日本人より日本人らしい総統がいたとか、日本人にとっても友好的で日本の植民地統治を肯定すらしている人がいるとか。あるいは、東日本大震災のような大災害が発生するたびに、いつも多額の義援金を寄せてくれるとか。これらはすべて台湾＝「親日」というステレオタイプのイメージを作り上げるものです。ですが、これは本当の台湾でしょうか。明らかに違います。

もちろん、こうした偏った認識は、日本が一方的に作ったものでもありません。しかし同時に否定できないことは、日本社会がこれまで台湾を単純に「親日」対「反日」、「植民統治肯定論」対「植民統治万悪論」といった単純化され脱文脈化された白か黒かの二項対立的な価値の枠組みのなかで理解し、そのために台湾認識を偏ったものにしてきた、ということです。ですから私たちは台湾史を教えるにあたり、こうしたステレオタイプ、つまり、さきほど申し上げた通説・俗説・誤説を意識的に持ち出して議論すべきなのです。

#### 第4節 台湾＝「親日」のステレオタイプを問い直す

台湾は日本に対して本当に友好的だと言い切れるのか。日本だけに友好的なのか。あるいは、どの国の人にも友好的なのか。もし台湾がどの国の人にも友好的ならば、日本に友好的ということは、とりたてて強調することではありません。たとえば仮に台湾が日本に特に友好的なのだとしたら、それは何が原因なのか。その友好は絶対的なものなのか、相対的なものなのか。あるいはまた、比較の上でのものなのか。そもそも比較しうる対象があるのか。このように問い始めると、友好を絶対的とみなすことはできません。

歴史から台湾を理解しようとするとき、日本が50年間、台湾を植民地として統治したということは、どうしても避けられない重要なテーマです。しかし、日本による植民地統治の真相はいったいどういうものだったか。いかに理解すべきか。さらには、台湾は本当に日本の植民地統治を肯定しているのか。もし台湾が日本の植民地統治を肯定しているのであれば、それは全面的な肯定か、それとも部分的な肯定か、あるいは条件付きの肯定か。なぜ植民地統治が肯定されるのか。植民地統治と呼ばれるものが、なぜ肯定され得るのか。私たちはより深く、一つ一つ理解してもらう必要があります。とりわけ、一般の日本人、日本の高校生など、台湾や台湾史の研究者ではない人々にこうした問題を深く考え理解してもらう必要があります。

また、1895年の下関条約という国際条約によって日本は新領土台湾を獲得しましたが、この新領土台湾はなぜ植民地と呼ばれたのか。いわゆる植民地統治とは何か。これらすべてを深く理解する必要があります。こうした問題は、歴史的な文脈のなかや、植民地統治経営の構造のなかに位置づけて理解する必要があります。これは簡単な問題ではありません。良い悪いとレッテルを貼って簡単に言い切れるものではありません。台湾や台湾史を教えるにあたり、受講者をこう

した深い議論に導いていくべきなのです。さらに、歴史的な文脈や構造の中でこれらを理解させると同時に、現代の座標の中で判断させる必要があります。結局のところ、私たちはいつも未来に向かうためにこそ歴史を振り返るからです。

植民地統治の理解と関連することですが、日本人は戦前の中国侵略については常に意識するのに、台湾での植民地統治についてはあまり意識していません。例えば、日本の高校の歴史教科書には、かならず中国への侵略あるいは進出の記載がありますが、私の知る限り、戦前台湾での植民地統治について教科書に書かれていることと言えば、おそらく台湾民主国と霧社事件、この二つの簡単な紹介程度でしょう。

## 第5節 台湾の特殊性を教える

また、日本で台湾を教えるにあたり、特に強調したいのは、台湾と中国の違いです。言語や文字、それに歴史・文化など多くの面で似ているところがあるため、台湾と中国の間には一致する点も多いようにみえますが、私たちは両者の違いを特に強調しなければいけないと思います。

台湾はもともと中華帝国の辺境にあり、近代になって日本に割譲され、50年間の日本による植民地統治を経る間に、植民地的近代化を遂げました。1945年以降、台湾と中国大陸の二地域は、ほぼ異なる政権と異なる体制の下でそれぞれに発展を遂げました。言い換えれば、現在の社会を形作ってきた、最も変化の大きな近代の120年間、台湾と中国はそれぞれ異なる発展の道を歩んできたのです。ですから、おのずと異なる価値観や社会観、政治や経済体制が形成されました。

また、私たちは台湾を単純化すべきではありません。台湾の多様性や複雑さを直視する必要があります。どの社会も一枚岩であるはずがありません。日本にもおそらく、階級、地域、イデオロギーや政治的主張の違い、エスニシティの違いがあるでしょう。台湾の複雑さと多様性はより顕著です。言語的なことだけを見ても、台湾人の日常生活には、同時に北京語（台湾華語）、福州語、客家語、10数種類の先住民族の言語が存在します。時間軸で見れば、台湾にはもともと住んでいたオーストロネシア語族の子孫や、16～17世紀以降に中国南方からやってきた移住者の子孫、それに1949年以降に中国各地からきた外省人とその第二・三代がいます。また、最近ではかなり多数の女性が海外から台湾に嫁いで来ています。いわゆる外国ルーツの配偶者です。彼女たちはいまや多くの台湾の子どもたちの母になっています。

16世紀以前、台湾はオーストロネシア語族の居住地でした。17世紀はじめ、台湾は欧州諸国の中継貿易基地となり、中国南東から多くの人々が陸続とやってきて、定住の植民者となりました。20世紀直前には日本の植民地となり、戦後は国共内戦に敗れた国民党が台湾に撤退したため、台湾は長い間冷戦構造に組み込まれることになりました。複雑かつ絡み合った歴史経験は、台湾人が背負う重荷になりました。1980年代以降の民主化と自由化を経て、台湾は権威主義体制から脱却し、同時にもう一方で、台湾化という課題も加わり、先ほど申し上げた歴史の重荷を背負いながら、エスニック・グループ間の相互承認や相互寛容を学んできました。思うに私たちは、台湾や台湾史を教えることを通して、日本の方々に、こんなにも地理的に近く、こんなにも歴史

的に緊密な関係にある台湾の特殊性を伝えるべきなのです。この特殊性こそ、日本のみなさんに理解していただきたいことです。

## 第6節 博物館が描き出す台湾の特質

台湾の特殊性という点に関して、私の現在の仕事や私の十数年にわたる取り組みを例にお話しします。ご存知のとおり、私はいま故宮博物院の院長を務めています。故宮博物院が収蔵するのは、中国の士大夫や歴代王朝が残した優れた芸術品です。一方、故宮の斜め前、徒歩10分足らずの場所には順益原住民博物館があります。この二つは完全な対極を成しています。一つは文字化された士大夫の作品、ひいては歴代王朝の収蔵品があり、もう一方は、なにより台湾という土地に根ざしたもので、先住民族のもので、文字のない時代に使われていた道具や彼らの物質文化を展示しています。私は台南の国立台湾歴史博物館の館長を務めたこともあります。国立台湾歴史博物館で私たちが目にするのは、士大夫の作品ではなく、庶民が日常で使うものや文化に関するものです。日本人が台湾を訪れる場合、おそらく足を運ぶであろう場所のひとつは、二二八紀念公園内の国立台湾博物館でしょう。日本の人たちは、かつて日本人が建てた新古典主義の博物館を見て、いくらか親しみを感じるかもしれません。それが「日本的」だからです。ですが、この博物館から歩いて3分もしない場所、同じ敷地内には日本植民地統治からの解放後（1947年）に起きた歴史事件に関する台北二二八紀念館があります。

### おわりに

先ほど申し上げたいいくつかの博物館を仔細に見ていくと、気づくはずですが、台湾には様々なものが存在する、と。けれども、私たちは互いの違いを認め合い一つの共同体を形成していこうとしています。これが台湾です。日本で日本人に対して台湾や台湾史を教えるとき、台湾の最も重要なこの特質を伝えていただきたいと思います。これが今回の基調講演でお話ししたかったことです。ご静聴ありがとうございました。